

人生の足跡をたどり、次世代につなぐ自分史ストーリー

創刊号

The 内藤 成富

Forlife Magazine-The Story



特集

弓道の醍醐味…余計なことを考えずに無心で

教員時代の思い出…43年間を振り返る

野菜作り・囲碁・俳句・書道…日々の暮らしの嗜み

The 内藤成富—創刊号—
Forlife Magazine 「TheStory」
2016・1月



写真上より
特集 内藤成富にクローズアップ①・②・③



Contents 目次

- Page02 : Column 「思い出の原風景」
—共同墓地のお堂
- Page04 : 特集 内藤成富に、クローズアップ①
弓道の醍醐味
- Page07 : Column 「人生の師を仰ぐ」
—小尾昌夫氏
- Page08 : 特集 内藤成富に、クローズアップ②
教員時代の思い出
- Page10 : 特集 内藤成富に、クローズアップ③
野菜作り・俳句・囲碁・書道
- Page12 : 私の履歴書
- Page13 : 自分史年表
- Page14 : 家族たちの肖像
- Page16 : 私の逸品
—セイコーウォーツ卓上時計

Column

思い出の原風景—こころの故郷を訪ねて



共同墓地の「お堂」(山梨県北杜市長坂町白井沢)

生まれ故郷の野山で遊ぶ

子どもの頃を夢に思い、心巡る

内藤成富さんが子ども（泉尋常高等小学校）の頃によく遊んだ場所が、長坂町の生家近くの共同墓地にある『お堂』だという。

「80年近くも行っていない」というその地を訪ねたが、山村の集落には田んぼがあり、用水路が流れ、そこはかたない風情が漂う懐かしい日本の原風景そのものだった。山林の裾野には、共同墓地が南アルプスの山々を眺めるように立ち並び、その傍らに赤い屋根の「お堂」が佇んでいた。お堂前の空き地には、今は滑り台や鉄棒などの遊具が備えてあった。

この空き地で、近所の同級生らと4〜5人で「かくれんぼをしたりして、日が暮れるまで遊んだ」という。80年前、記憶の片隅に残る楽しかった思い出の一つひとつを辿り、話を聴いていると、唱歌「ふるさと」の歌詞がよぎった。

この歌は、子どもの頃に野山で遊んだことを遠い地から懐かしみ、故郷から離れて学問や勤労に励む人の心情を歌っている内容だ。成富さんにとって、今なお夢に思い、心を巡る、忘れられない原風景が、生まれ故郷なのかもしれない。



行射の作法で2射取矢をするため、次矢を小指にかける。



「肌脱ぎ」は左袖を弦で払わないように、片肌を出して行射する作法。



米寿の御祝に撮影された弓道衣姿の成富さん。

弓道歴60年、段位は5段
きっかけは、養父

成富さんが弓道と出会うきっかけは、「昭和29年に28歳で結婚して、高根町下黒沢に来てから」という。長坂町白井沢にある小松家の三男として出生し、結婚を機に、妻和子さんの実家の隣家の内藤家（後継ぎが戦死）へ両養子として入った。當時は、家督を継ぐ長男以外が養子となることは、「家族の食い扶ちを少しでも確保するために、当然のことだった」と食糧難だった時代背景もあるという。

弓道の師匠は、養父の重隆さん。「ここ（内藤家）のお父さんが弓道をやっている、家の敷地内には矢場があつてね」。養母のだいさんからは「お父さんが元気なうちに、弓道を教わるときなさい」と勧められたこともあり弓道を始めた。「最初の頃は、見よう見真似をしてみたものの距離を短くしてやっていたが、要領がつかめると段々に距離を長くしていった」。その後、赴任先の長坂町立秋田小学校や他の学校でも、弓道の先生に教わりながら研鑽を重ね、

段位は五段にまで昇段。89歳になった現在も稽古を続けている。

余計なことを考えず 無心で的を射ること

弓道の醍醐味は「自分の気持ちが悪く落ち着いた心境で、的を射抜いた瞬間が気持ちいいね」、「余計なことは何も考えないで、無心で射る。前は時はこうだったとか、妙な気持ちはすべて捨て、今に集中して、自然に手から離れて射ることが大切」という。

「身体も状態が良い日は、的当たりも良いが、風邪を引いている時などは矢も乱れる」。

平成15年（77歳）には、肺の手術をし1/4を切除した。肋骨も1本削ったにも関わらず、退院後すぐに弓を引きに行った。家族の心配を余所に、「武川の弓道場には一日おきに行つて、70〜80代の人たちと稽古していた」。そのままにして、稽古に出向くのは「練習を怠ると、弓は引けなくなる。弓を引く力を維持するのが大変だから、練習は欠かさなかった」という。



弓道衣は、稽古・試合では白筒袖・黒袴を着用。奉納射会など改まった場では、黒の紋付に縞袴の和服を着用する。

わが道しるべ

弓道の醍醐味

内藤 成富

今から約60年前に弓道と出会った。89歳になった現在も、弓道衣を着て、弓を引く立ち姿は凛々しい。弓道との関わりを通して、成富さんの人物像や人生観を尋ねた。

Column



教員になり、30代の頃の成富さん

当時、初等科を出た後の高等科(今の中学校)は2年間で、その2年間の担任をして頂いたのが小尾昌夫先生だった。

高等科を担当する先生方はベテランが多く、小尾先生も当時で50歳くらいだったと、記憶している。小尾先生は、冗談を言っただけで笑わせられるような愉快な先生で、とても人気があった。「今、思い出してみてもよく分からないのだが、なぜか私を褒めて下さり、今でいう生徒会長にも推薦して下さいました。いつも気にかけてもらい、たいへん可愛がって頂いたという記憶が鮮明に残っている」。

高等科2年生になり、進路を決める面接で私は「将来は教員になりたい

いと思っています」と言った。そんな私に、小尾先生は最初、師範学校を薦めた。

しかし、当時は戦時中で、若い男性は戦争に取られ、教員が不足していた。小尾先生は臨時に教員養成所が開設される情報をいち早く入手し、「そちらは、どうか」と薦めた。師範学校は3年で卒業だが、教員養成所は2年で卒業できるのだという。また、その教員養成所には先生の知り合いがいるとのこと、とても心強く思い、私は迷わず、臨時教員養成所へ行くことにした。そして、卒業後、若干17歳で教員の道を歩むことになった。

教員になりたいと思ったのは、生徒の良いところを積極的に見つけ、

いつも笑顔が絶えない教室を築こうとする理想の教員像、小尾先生のような先生に憧れていたからだ。

小尾先生は退職後は、高根町議会議員としてご尽力。その後、病気で逝去したことを聞き、「葬儀にお線香を手向けに伺った」と回想する。

「私が現在あるのは、多感な高等科時代に、尊敬する師に巡り会い、教師の道に導いていただいたからだと思います」。

「43年という長い教員時代を無事勤め上げることが出来たのも小尾先生のお陰と深く感謝している。教員から退いて40年近くが経つが、今でも当時の多くの子供たちの笑顔が私を励ましてくれていて」と目を細めた。

た。

人生の師を仰ぐ―我が恩師について

泉尋常高等小学校高等科担任

小尾昌夫先生



平成20年「ねんりんピック」全国大会に、山梨県の代表選手として出場。

弓道で県代表

「全国ねんりんピック」へ

平成20年に開催された「ねんりんピック鹿児島大会2008」では、弓道の種目で県代表に選ばれた。その時の心境を成富さんは、「まさか、思いもよらなかつたし、びっくりした」と当時のことを笑顔で語る。

山梨県の代表に選ばれた選手たちには、葡萄の色を基調としたユニフォームが配られた。「県代表で、全国大会に行つてね、国体ならいいけど、ねんりんだからね」と、少し照れ、大会前に壮行会があり、「他の種目の選手の衆も、同じ服と一緒に揃えて着て、参加したこと」が、県代表として選ばれたことに改めて「感激し、良い思い出として印象に残っている」のだという。

養父から引き継がれる 弓道の道

旧高根町や合併後の北杜市でも、体育協会の弓道部長の役を担

い、地域で弓道の振興・普及活動に尽力した。資料やお知らせのハガキ作成など、当時、ワープロを使って「80歳過ぎまでやっていたい。体協の会議にも、最近まで出席していた。一生懸命、こういうことを続けてきたから、呆けないね」と冗談交じりに話す。

長男・剛さんも高校・大学で弓道に励んだ。養父の重隆さんから、親子3代に亘り継承され、「息子は高校で弓道を始めたけれど、弓道の良さをしみじみと味わえていないかも。親子でも、弓道の話はあまりしなかったからね」と述懐する。

「弓道は、礼に始まり、礼に終わる。まずは形から入ること。姿勢を正しくすることが大事」と話し、「左右の腕のつり合いを整えて、胸の開き方をグーッと引く癖に気をつければ、姿勢が良くなる。姿勢が良くなると、何も余計なこととは考えない無の心境になり、いつでも自然体でいられる」と長年弓道と向き合ってきた真剣な姿勢を伺わせた。



大会当日に競技開始までの控え(左)。「ねんりんピック」出場前の壮行会にて、弓道場で集合写真(右)。